

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕 ギーセンの写真

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 源太, Okamoto, Genta メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000733

ギーセンの写真

岡本源太

ドイツのギーセンを訪れたのは、哲学者ハンス・ブルーメンベルクのいた大学町だから、というわけではなかった。『メタファア学のパラダイム』（一九六〇年）を上梓してほない若きブルーメンベルクは、ギーセン大学で同僚の文
学者ハンス・ローベルト・ヤウスらとともに、「詩学と解釈学」研究会を組織している。一九六三年からおよそ三〇年
にわたり、ドイツの人文系の学際研究を切り拓いていった研究会だ。やがてブルーメンベルクは戦後ドイツでもっとも
深遠な哲学者のひとりになり、ヤウスも受容美学の創始者になった。といっても、彼らがギーセン大学にいた期間は短
いし、それでこの町に何かがあるのでもない。

ただ、同じ一九六〇年代初葉、僕の祖父がギーセンに暮らしていた。その思い出はときに聞くことがあり、また日記
や写真を目にしてもいた。のみならず、どうやら祖父の叔父も——正確には祖母のほうの叔父だが——いつときギーセ
ンに滞在していたとおぼしい。一九二〇年代末葉のことと思われるが、滞在の経緯は紀行を読んでも判然とせず、美し
い雨と庭と夕食会の思い出が記されているばかりだ（三浦耀『建築・風景』一九三二年）。その祖父たちのギーセンを
見てみたい、と思っていたのだった。

ギーセンは古くからの学都である。その大学はブルーメンベルクよりは化学者ユストゥス・フォン・リービッヒや物
理学者ヴィルヘルム・レントゲンの名で知られ、そのため町にはリービッヒ博物館や数学博物館などがある。とはいえ、
古い街並みが残っているでもなく、とうてい観光名所とはいえない。

実際に駅に降り立つと、駅舎はユージェントシュティール建築ながら周辺はいくぶん殺風景で、そこからチェーン店ば
かり目立つショッピング街を通り抜けて、何の変哲もない中心街にいたる。ところどころ、昔からありそうな教会や大
学の建物、おおらかに生い茂った植物園が見える——それだけだ。初めこそ写真を撮ってみたりもしたものの、とくに
祖父たちのギーセンを偲ばせるものがあるでもなく、結局はひねもすあてどなく歩き回るばかりで過ごした。

もちろん二一世紀の今、一九二〇年代や一九六〇年代のそのままのギーセンがありはしない。名しか知らぬ町に憧れ、
話に聞いただけの町を懐かしんでも、遅かれ早かれ幻滅するものだ。小説家ジェイムズ・ジョイスの記述したようなエ

ピファニーの瞬間を期待していたわけではない。予想どおりの期待外れ、とても言おうか。

だから、そのあとに起こった変化にはいくぶん戸惑った。その日から祖父の撮ったギーセンの写真が「見える」ようになったのだ。これらの古ぼけた写真にギーセンの街並みが見える。この街路はどこに伸び、この建物はどこ奥に続き、人々はこの歩みゆくのかが見える。光が差し、風が吹き、声が響いてくるのが見える。つまりは、これが写真を見るということだった。それに比べれば、以前はただそのような色と形の図柄を見ていたにすぎなかった。

見るとは複雑な行為だ。長年の熟練がいる。いわゆるモリニュー問題——生まれつき眼の見えなかった成人が医療によって視力を回復したとき、それまで触覚によって識別していたものを視覚だけで認識できるか——を思い起せば十分だろう。この問題が提起された十七世紀以来、そのように開眼してすぐさま視覚だけで事物を認知できた事例は報告されていない。それどころか、その後の長い長い訓練を経て十分に視覚を働かせることができるようになる者は多くはない。その深刻な葛藤と危機は、たとえば神経科医オリヴァー・サックスが伝えているとおりだ（『火星の人類学者』一九九五年）。

なかでも写真を見るとなれば、いっそう複雑な行為である。なぜ視覚は写真の二次元の図柄を三次元的な現実の記録として認識できるのだろうか。美学・美術史の研究ではしばしば調査先で芸術作品の記録写真を撮り、僕自身の手許にも膨大な数がある。しかし、一九世紀に写真が研究で活用され始めたとき、論争が起こっている——素描と写真のいずれが正確な記録でありうるか、という論争である。写真だと思っただろうか。写真は肉眼と異なる距離や角度で撮影され、レンズや絞り次第で像がさまざまに歪み潰れる。だから実は、熟練者による素描のほうが記録として正確でありうるのだ。ただ写真のほうこそ素描より速く、それだけ多く記録できる。同様の論争は、カラー写真でも繰り返された。カラー写真はそのときどきの光の具合で別の色味になり、そもそも撮影時に三色に分解したものを現像時に再合成するのだから、あとでいくらでも色調が変わりうる。かくのごとく論争は、デジタル写真でも、生成人工知能による画像補正技術でも、そのつど繰り返されてきている。ここで問うべきは、写真が現実には相応の熟練が必要なのである。

ギーセンを訪れて理解したのはこのことだった。祖父の暮らした町の写真を見るには、僕自身がこの町を実際に経験しなくてはならなかったのだ。その意味では、現代は不都合な時代かもしれない。詩人ステファヌ・マラルメの言葉を使い換えながら批評家スーザン・ソントグが指摘したように、「今日、あらゆるものは写真になるために存在する」（『写真論』一九七七年）。観光が産業の最たるものになり、世界そのものが美術館になって、あらゆるものが写真の素材でしかないか、すべての経験が撮影の口実にはかならない。もはや思い出の写真はなく、かろうじて写真の思い出があるかどうか。それには経験がある。少なくとも、ギーセンの思い出——期待外れで退屈と言えなくもない——が、祖父の古ぼけた写真を見えるようにしてくれたのであった。

（美学）